

大津市における歴史的事象について

目 次

1 . 大津市に係る主要な歴史的事象	1
2 . 大津京について	3
(1) 大津京時代の概要	3
(2) 大津京遺構の概要	6
(3) 大津京周辺寺院について	10
3 . 主要な社寺の概要	11
4 . 中世・近世における都市形成の経緯	14

1. 大津市に係る主な歴史的事象

・近江大津宮遷都以前

日本書紀や古事記によれば、大和朝廷成立期の4世紀頃、景行・成務・仲哀の三天皇が高穴穗宮（現在の穴太）を都としたと伝えられている。また、百穴古墳や穴太古墳は渡来人のものらしく、大友村主、穴太村主などの勢力が存在したと伝えられている。また、これらのことが天智天皇による大津京遷都に影響したとする説もある。

・646年に近江の国府を設置

近江国は、藤原仲麻呂をはじめとする律令政府の最高位ないしそれに準じた地位にあった最高級貴族が、近江守に就任しているという特異な国であった。

・667年に天智天皇により近江大津宮へ遷都

緊迫した東アジア情勢のもと、国防を主な目的とした緊急避難的な遷都であったと考えられており、飛鳥と連携して中央政府機能を果たしていた。

都が置かれたのは短期間であったが、庚午年籍（我が国最古の戸籍）の作成、官制の施行など律令体制の基礎づくりという重要な取り組みが行われた。

・672年に近江大津宮廃都

壬申の乱により近江朝廷が敗退、大津宮は廃され飛鳥浄御原宮に遷都された。

・761年、保良宮（伽藍山西部と想定されている。）に遷都

遷都は藤原仲麻呂が推進したとされている。

この際、鎮護の寺として石山寺の寺観が整った。（747年に聖武天皇の命で良弁が開創）

・785年に最澄が比叡山に登り、788年に薬師堂を創建、比叡山寺と称す

823年鎮護国家の道場として朝廷に信仰され、延暦寺の寺号を与えられた。

・866年に延暦寺の円珍が園城寺を天台別院として再興

7世紀後半、大津京の南端に大友皇子の子 与多主が創建したと伝えられる。

・近江八景の誕生

応仁の乱以降、戦乱を避けて大津に滞在する風流人が多く、その人々により大津の名勝の中から近江八景が生まれた。

・交通の要衝としての発展

京と東国・北国を結び、水陸の交通拠点となる大津、坂本、堅田は軍事上あるいは物資の中継基地として重視され、大津城、坂本城等が築かれ、また港町、宿場町として発展した。また、経済的な発展に支えられ町衆文化も栄えた。

各時代の主要な歴史的資源

時代区分	主要な資源	歴史的位置づけ	関連資源
飛鳥・奈良時代	おうみおおつきょう 近江大津京	大化改新後、律令制体制の基礎づくりが行われた我が国の都	おうみおおつのみやしにしごり 近江大津宮錦織遺跡、南 しがちようはいじ あのをはいじ 滋賀町廃寺跡、穴太廃寺跡、 すうふくじ おんじょうじ 崇福寺跡、園城寺前身寺院 跡
	いしやまでら 石山寺	平城京 <small>（ばいとほらのみや）</small> の陪都保良宮（761年遷都）の鎮護の寺として整備。平安後期に観音霊場として著名となった。	いしやまでら <small>（がらんやま せた）</small> 石山寺（伽藍山、瀬田川）
	おうみこくふ 近江国府	奈良時代から平安時代初期にかけて、中央から国司が派遣された政庁跡。	おうみこくちよう そうやま 近江国庁跡、惣山遺跡、 どうのうえ ちゅうろ 堂ノ上遺跡、中路遺跡
平安時代	えんりやくじ 延暦寺	天台宗の総本山。785年に最澄が開いて後、仏教の中心地として、広く信仰を集めている。	こんぼん ちゅうどう しゃかどう よかわ 根本中堂、釈迦堂、横川 ちゅうどう ひえいざん 中堂等（比叡山）
	おんじょうじ 園城寺	平安時代に円珍が天台別院として再興。延暦寺の山門に対して寺門と呼ばれた。	おんじょうじ ながらやま 園城寺（長等山）
鎌倉時代	えんりやくじ （延暦寺）	鎌倉新仏教の開創者を多く輩出。	
	おんじょうじ いしやまでら （園城寺、石山寺）	西国三十三所観音巡礼 <small>（ふだしょ）</small> として広く信仰を集めた。	
室町時代	さいきょうじ 西教寺	てんだいしんせいしゅう 天台真盛宗の総本山。1486年、 しんせい 真盛が再興。	さいきょうじ 西教寺
	おうみはつがい 近江八景	応仁の乱以降、戦乱を避けて大津に滞在する風流人の中から近江八景が生まれた。（江戸初期に現在の八景が定着。）	おんじょうじ いしやまでら うきみどう 園城寺、石山寺、浮御堂、 からさき せ たからはし あわづ 唐崎神社、瀬田唐橋、（粟津 の湖岸：なぎさ公園）
	かた た 堅田	しゅうら おやごう 「諸浦の親郷」として先導的地位を得、湖上を制覇した。百姓・商工業者の全人衆、地侍、土豪層による殿原衆といった村落組織を結成し、独自の文化を形成してきた。	ほんぶくじ まとうどしゅう 本福寺（全人衆の結束の中 核）、祥瑞寺（殿原衆の結 束の中核）
	さかもと 坂本	えんりやくじ ひよしだいしゃ 延暦寺・日吉大社の門前に位置し、水陸の拠点として商業的発展が見られた。	
戦国時代	さかもとじょう 坂本城	明智光秀が延暦寺焼き討ちの後に築いた。	さかもとじょう 坂本城跡
	おおつじょう 大津城	豊臣秀吉が、京・大坂・伏見と東国・北国を結ぶ交通の拠点として大津を重視し築いた。	おおつじょう 大津城跡
江戸時代	おおつじゆく 大津宿	徳川家康が大津を東海道の宿に指定。これ以後、宿場町、港町として賑わいを見せる。	歴史的町並み、札の辻等の 地名、大津祭
	ぜ ぜじょう 膳所城	ぜ ぜ ぜじょう 膳所崎に膳所城が築かれ、城下町が形成された。	ぜ ぜじょう ながやもん 膳所城跡、長屋門等

2. 大津京について

(1) 大津京時代の概要

大津京関連歴史年表

時代	西暦	天皇	事項	都	備考
飛鳥時代	645	皇極 孝徳	大化の改新 ...中大兄皇子(後、天智) 近江の国府を瀬田に置く	難波豊碕宮	近江国府 国府とは、中央政府より派遣される地方官(国司)が事務をとった役所(国衙または国庁)があった場所。
	646	天智	708年から常駐	近江大津宮	近江国府の長官である近江守は、奈良~平安時代にかけて、藤原仲麻呂をはじめとする律令政府の最高位ないしそれに準じた地位にあった最高級貴族が就任するという特異な国であった。
	662		白村江の戦		大津宮遷都 667年、天智天皇が飛鳥から近江大津に都を移し、大津の地名がこの時に始まる。大津宮の範囲の目安としては「園城寺」「穴太」間といえ、その地域には大津宮時代に存在したとされる四寺院(穴太廃寺、崇福寺、南滋賀町廃寺、園城寺前身寺院)の遺構が残る。
	663		大津宮遷都 崇福寺建立 近江令制定 天智天皇死去		
672	弘文 壬申の乱 ...大友皇子(近江朝廷、天智の子) ×大海人皇子(天智の弟) ...大海人皇子(後、天武)勝利により、乱後、大津宮荒廃				
奈良時代	747	大武	飛鳥浄御原宮遷都	飛鳥浄御原宮	近江令 天智天皇の命令を受けて藤原鎌足らが、編纂した我が国最初の令(刑罰規定を除く基本法)である。唐のように、法律・制度の完備した中央主権国的な法治国家を建設のために、国家の基本法典を整備する事が不可欠であった。
		聖武	良弁、石山寺開創 ...聖武天皇命による	平城京	保良宮 淳仁天皇が国都平城宮とは別に近江国滋賀郡に新設した都。推進者藤原仲麻呂が反乱で敗死したため未完成のまま廃絶した。
	761	保良宮の造営ほぼ完成 石山寺を鎮護の寺として整備	長岡京		
	788	桓武 最澄、比叡山寺創建 823年 延暦寺に改名			
平安時代	794	清和	古津を「大津」に改称	平安京	交通の要所 大津宮廃都後、大津は古津(古い港)と呼ばれていたが、平安京遷都後は、その東玄関として、また湖上交通、陸上交通が集中する交通の要所として復活した。
	862		円珍、園城寺(三井寺)再興 ...園城寺は7世紀後半、大友皇子の子与多王が建立したと伝えられる	仏都「大津」 石山寺開創、延暦寺創建、園城寺再興と「仏都」として甦った。	

大津京遷都の背景

663年の白村江の戦いののち、667年3月19日に中大兄皇子が都を飛鳥から近江へと遷都し、翌年1月に天智天皇として即位した。遷都の理由としては、白村江の戦いで敗戦していたため、唐・新羅連合軍に攻め込まれたときのためなど諸説がある。

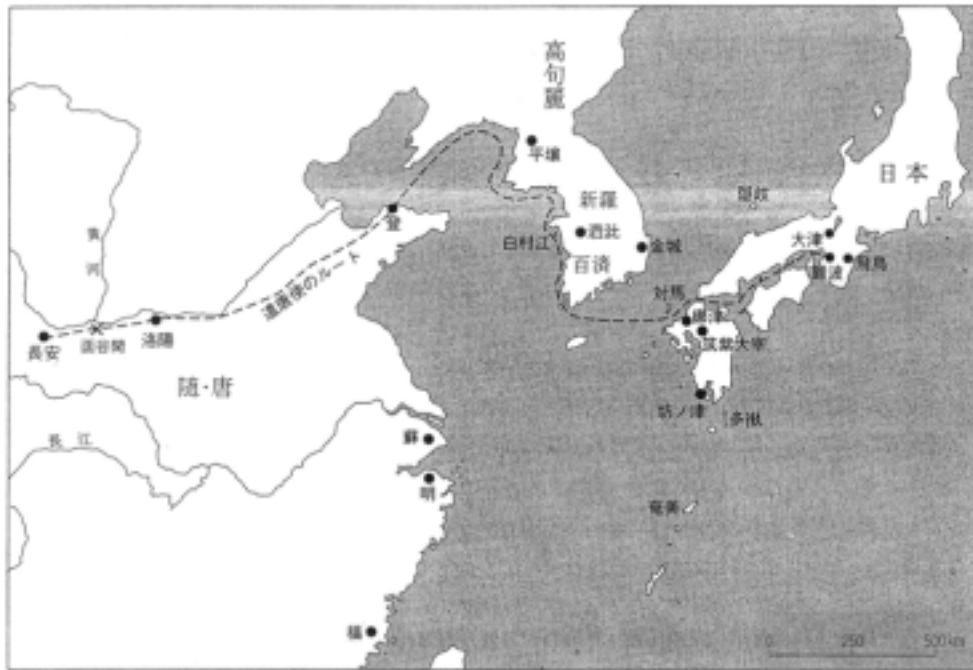
7世紀中頃、朝鮮半島をめぐる情勢は緊迫していた。日本と友好関係にあった百済は、660年新羅によって滅ぼされ、その復興を目指して朝鮮半島に出兵した日本と百済の連合軍は、白村江で新羅・唐に大敗北を喫した。その結果、逆に日本が新羅・唐の連合軍に攻撃を受ける可能性が懸念されたため、琵琶湖を控えた大津の地に都を移すことで、敵からの攻撃に備えるとともに、琵琶湖の湖上交通を通じて、東国との連携を図ることを意図した。

天智天皇は、天皇を中心とする中央集権国家を目指したが、遷都5年でこの世を去り、この後に起こった壬申の乱によって都は再び飛鳥に戻された。

大津に都があったのは、わずか5年間であることから、大津京の場所を特定するのは困難であったが、昭和49年と53年の調査によって、古代の建物の柱跡が発見され、大津宮の中心部分とされた。

国内政治		外 交		備 考
645	大化の改新 ...中央集権国家確立を目指す ...クーデターによる新政権のため、反対勢力多数 ↓ 国内外の不安定な情勢 ↓ 危機と課題を解決する希望の新首都	660	百済滅亡	国際情勢 ・隋の滅亡、唐(618～907)の隆盛 ・新羅(356～935)の強大化 唐・新羅軍の侵攻に備え、山城を築く
		661	新羅征討の軍発進	
		663	白村江の戦いで大敗 百済復活を目指し、 日本・百済軍 × 唐・新羅軍	
667	近江大津宮遷都	668	新羅による朝鮮半島統一	太政大臣は国政の最高責任者
668	中大兄皇子即位(天智天皇) ...それまでは、皇太子のままに執政 後継者は大海人皇子(天智の弟)で政界合意			
671	大友皇子(天智の子)、太政大臣となる ...大海人皇子は出家し、吉野に引退 天智天皇死去 壬申の乱			
672	...大友皇子 × 大海人皇子 大海人皇子(後、天武天皇)勝利により、乱後、大津宮荒廃 飛鳥浄御原宮遷都			
673	大海人皇子即位(天武天皇)			

参考 大津京時代関連図等



7世紀の東アジアの状況（「古代景観史の探求」金田章裕、2002年による）

	天皇	大和	摂津・河内	山背	近江
593	推古	鹿嶋宮→小墾田宮			
	舒明天	飛鳥岡本宮→田中宮→ 額田宮→百濟宮			
	皇極	小墾田宮→飛鳥板蓋宮			
645	孝德	(飛鳥河辺行宮)	難波長柄豊碓宮		
	高祖	飛鳥板蓋宮→飛鳥山原宮→ 後飛鳥岡本宮			
	天智				近江大津宮
672	天武	島宮→岡本宮→飛鳥浄御原宮	難波京		
	持統	飛鳥浄御原宮→藤原京			
697	文武				
707	元明	平城京			
	元正				
724	聖武		難波京	藤原京	紫香楽宮
749	孝謙				保良宮
	淳仁		山背宮		
	称徳				
	光仁				
781	桓武			長岡京→平安京	
	平城				
	嵯峨	平城宮			
823	淳和				



古代宮都の変遷（「日本の古代宮都」岸俊男、1993年による）

(2) 大津京遺構の概要

研究・発掘調査の概要

大津宮は、『日本書紀』、『懐風藻』、『藤氏家伝』などの史料から、内裏・浜台・大蔵・宮門・朝廷・大殿・漏刻・内裏 弘 殿等の施設があったことがわかるが、その所在地は長い間不明であった。所在地をめぐるには、大津市市街・錦織・南滋賀・滋賀里・穴太等の説があり、論争が続いていたが、昭和49年錦織地区の一画で大津宮の中心施設と思われる遺構が発見された。以後周辺地域における数次の発掘調査を経て、内裏正殿・南門・回廊・塀等の遺構が確認され、大津宮の姿が次第に明らかとなってきた。そして、昭和54年に「近江大津宮錦織遺跡」として国の史跡指定を受けることとなった。

年代	事項	摘要
江戸後期 ～明治	所在地論争の始まり 錦織の字御所ノ内周辺	
明治末年 ～大正	学問的見地からの論究 …崇福寺と梵釈寺の位置から推測 滋賀里中央部から錦織 宮は「太鼓塚」・「蟻ノ内」	崇福寺：668年建立、滋賀里の西方山中 梵釈寺：786年建立、滋賀郡内、崇福寺 と近接
昭和3年	実証的論争の始まり 1928年 滋賀里山中の寺院跡、南滋賀の寺院跡の発掘調査	* 滋賀里山中寺院跡（崇福寺）についてはその後の調査無し
昭和13年 ～15年	1938年 ～1940年 滋賀里山中の寺院跡、南滋賀の寺院跡の再発掘調査	* 南滋賀寺院跡（南滋賀町廃寺）については、昭和32年の史跡指定後の現状変更に伴い断片的調査を実施
昭和16年	1941年 崇福寺跡、国史跡指定	
昭和32年	1957年 南滋賀町廃寺跡、国史跡指定	
昭和42年	1967年 大津京への直接的調査の始まり 西大津バイパス工事に伴う文化財位置協議	
昭和46年 ～47年	1971年 1972年 湖西線建設に伴う発掘調査 大津宮と関係のある官衙もしくは寺院に伴う遺構検出	* 後の調査で穴太廃寺南大門付近と判明
昭和48年	1973年 保育園建設に伴う発掘調査 白鳳期の寺院の遺構	
昭和49年	1974年 錦織二丁目字御所ノ内での発掘調査 大津宮の遺構検出	
昭和51年	1976年 穴太遺跡試掘調査開始	* 平成3年度発掘調査終了
昭和54年	1979年 近江大津宮錦織遺跡、国史跡指定 (以後現在迄5度にわたり追加指定)	平成4年度から順次、遺構表示・説明板設置等を実施中
昭和59年 ～60年	1984年 1985年 穴太遺跡第四次発掘調査 穴太廃寺らしい礎石が出土	
平成9年	1997年 穴太廃寺跡、国史跡指定	

近江大津宮錦織遺跡の調査概要

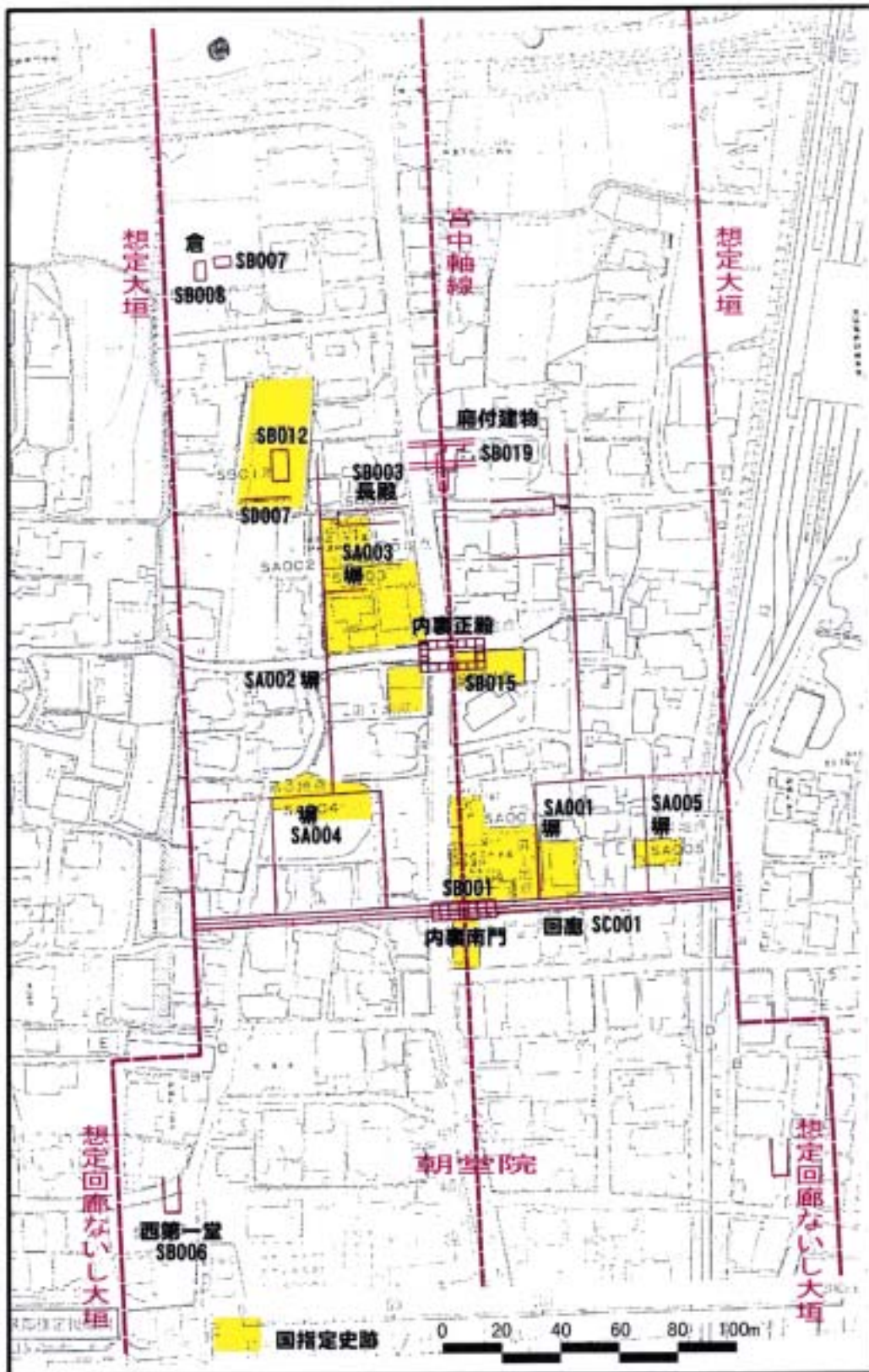
これまで、錦織・南^{にしこおり}滋賀・^{みなみしが}滋賀里・^{しがさと}穴太など大津北部において、滋賀県・大津市が30年近く断続的に小規模な調査を実施した箇所は約100箇所にのぼる。このうち、錦織において検出された大津京に関する遺構は10地点であるが、その大半は建物跡等の部分的な検出である。これまでに検出された遺構は連続性の少ない、断片的な遺構ばかりである。

- 1974年（昭和49年） 錦織地区で、大型の柱穴をもつ門（SB001）とそれにとりついた複廊回廊（SC001）が検出
- 1975年（昭和50年） 門跡の東南約135mで桁行二間以上、梁行二間の建物が検出
- 1976年（昭和51年） 南北棟の建物（SB006）が検出
- 1977年（昭和52年） 南北塀（SA002）、東西塀（SA003）、桁行四間の東西棟建物（SB003）、石敷溝^{いしじきみぞ}（SD007）（SB012）が検出
- 1978年（昭和53年） 一本柱列の塀（SA001）が検出
- 1983年（昭和58年） 門跡の北70mで大型の東西棟建物（SB015）、SA004が検出
大津宮内裏の中心部とみなしうる可能性がきわめて高くなった。
- 1986年（昭和61年） 一本柱列の塀（SA005）が検出
- 1993年（平成5年） SB015の北約70mで^{ひまし}廂付き建物（SB019）が検出

* これ以降も家屋の建替え時など継続的に調査を実施。

（ ）内は場所を特定するための記号
SB：建物、SC：回廊、SA：塀、SD：溝
記号に続く数字は、発掘順
記号数値は次ページの図参照

古代において、建物設置可能な錦織・南滋賀・滋賀里・穴太の扇状地のうち、南面して左右対称の宮域^{みやいき}を建設するのに最も適した地は錦織であり、また大津京に関連する遺構が集中して検出されるのも錦織であるため、大津京の宮域は「錦織」であったと判断される。これまでに検出されている建物、塀をもとに大津宮の中心部構造の復原が試みられているが、現時点では推定復原案である。



おおつのみや
大津宮中枢部推定復元図

《参考》推定内裏正殿・内裏南門復原図

近江大津宮の正殿と考えられる建物をはじめ、その前方の門・廻廊・柵列等が発掘調査によって確認されている。宮全体からみると、構成建物の一部にすぎないが、宮の中心部に当たると考えられる。

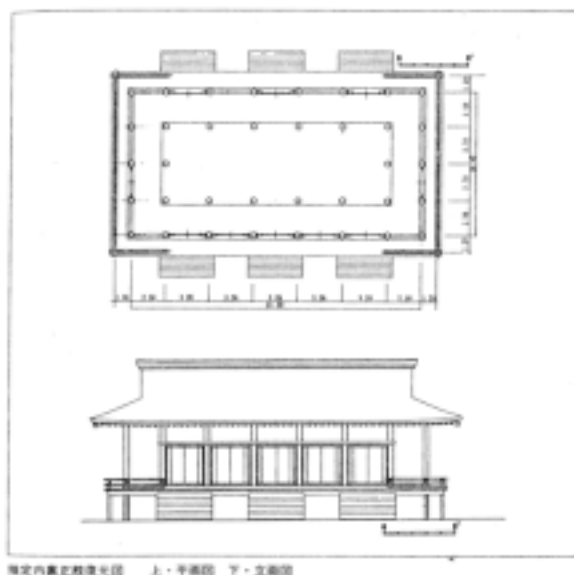
建物はいずれも掘立柱で、廻廊・長廊状建物・柵列の屋根は斉明天皇の飛鳥板蓋宮を想定して板葺と考え、巨材で年輪にそって割った板を内側に上面にして重ねて葺き、押えをのせたものと推定した。正殿と南門は「扶桑略記」内に崇福寺が檜皮葺と記されているので檜皮葺と考えた。古代の檜皮葺の工法は現在とはかなり異なって、厚い皮を用い、押縁を縄ぐくりで止めたものと考えられる。

正殿は桁行7間、梁間4間で、前期難波宮・藤原宮・平城宮等の大極殿・内裏正殿が桁行9間とするのとくらべると小規模である。構造は奈良県当麻寺前身曼陀羅堂に転用されている奈良時代の小材から復原された前身建物に準じ、柱の上に桁をのせ、梁を架け、妻飾は又首組、内部は合掌として入母屋造と推定した。

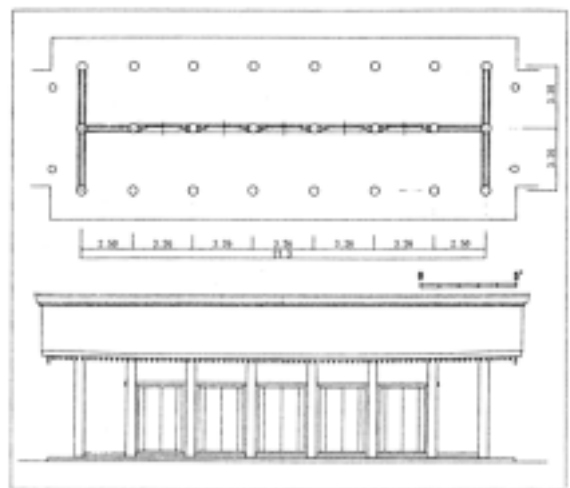
正殿の前の南門は桁行7間、間口21mに及び大規模な門で、平城宮・藤原宮の諸門が桁行5間とするのにくらべ、7間とするのはこの門の格式をあらわしていると考えられる。

廻廊・長廊状建物の構造は、奈良時代に紫香楽から石山寺に移築された板葺の藤原豊成殿や平城京発掘桁行で確認された構造に準じ、柱の上に梁を渡し、その上に桁をのせ、合掌は垂木を兼ねて桁の前角にかみ合わせて止め、合掌の頂上に棟木をかぶせるようにのせ、小舞をならべて板葺としたと推定した。

正殿両脇の廻廊内側に掘立柱で囲まれた方形の区画があり、前期難波宮では八角の楼閣が建つので、大津宮に於いても楼閣が計画されたと考えられるが、今のところは楼閣の存在は確認されていない。正殿と長楼状建物間に東西方向の柵列があるらしく、その中間にも建物のあった可能性があるがまだ明らかでない。柵列は平城宮第一次大極殿院外郭に使われた掘立柱から復原される屋根付き、土塀塗りの構造に準じて考えた。（奈良大学文学部教授 岡田英男 氏）



推定内裏正殿復原図 上・平面図 下・立面図



推定内裏南門復原図 上・平面図 下・立面図

出典：よみがえる大津京

(3) 大津京周辺寺院について

大津京には、同時代の寺院跡として、滋賀里西方山中の崇福寺跡、南滋賀集落内の南滋賀町廃寺、園城寺（三井寺）の前身となる寺院跡、穴太の穴太廃寺の4寺院が発見されている。

錦織における大津京に関する遺構群の方位は、真北に対して約 $1^{\circ}24'$ 西に振る角度を示しており、南滋賀町廃寺の西端を限る堀・溝、同寺周辺の約3町四方には、この方位に合った方格地割が認められる。一方、崇福寺跡、穴太廃寺は、やや方位がずれている。

4つの寺院がいずれも交通の要衝に立地することから、大津京を防御する性格を合わせ持っていたのではないかとする説がある。



3. 主要な社寺の概要

壬申の乱により大津京が廃された後、大津は古津（古い港）の名に甘んじてきたが、延暦13年（794年）の平安京遷都に伴いその外港、「大津」として復活した。ことに大津と平安京との結びつきを深めたのは仏教である。

8世紀中頃の保良宮の建設に伴う石山寺の造営、8世紀末頃の最澄による延暦寺の開基、円珍による園城寺の再興等によって、大津は都の人々の信仰を集め、さながら「仏都」の観を呈した。また、平安時代には、当時著名であった石山寺、園城寺などが、西国三十三所観音巡礼の札所となり一層の賑わいを見せた。

主要な社寺の概要

石山寺

縁起では、天平19年（747年）聖武天皇の命で良弁が開創したと言われる。

石山の名は、境内の硅灰石（天然記念物）に由来する。

天平宝字5年（761年）、保良宮の鎮護の寺として寺観が整備された。平安後期には観音霊場として著名となり、貴族女性らがしばしば参籠した。その後、西国三十三所観音巡礼の13番札所となり、広く庶民にも信仰された。

室町末期には、その風光が近江八景の一つ「石山の秋月」として選ばれている。

現在の本堂は、正堂が永長元年（1096年）再建で市内唯一の平安建築、礼堂が慶長7年（1602年）淀君らにより寄進されたもので、ともに国宝。また、多宝塔は源頼朝の寄進と言われ、建久5年（1194年）建立で国宝。

園城寺

大友皇子の邸宅跡にその子与多王が創建したと伝えられ、当初は土地の豪族大友村主氏の氏寺で、7世紀後半、白鳳期の古瓦が出土している。

貞観8年（866年）延暦寺の円珍が天台別院として再興した。正暦4年（993年）、円珍門徒が円仁門徒と対立し、比叡山を下りて同寺に拠り、以後、山門（延暦寺）と寺門（園城寺）に分かれて抗争した。その結果、堂舎は再三戦火に会ったが、足利尊氏、北政所（豊臣秀吉夫人）、豊臣秀頼、徳川家康らにより再建された。現在の堂舎はほとんどが江戸初期に建立、移築されたものである。

境内は三院からなり、北院には法明院、中院には金堂・唐院・鐘楼、南院には観音堂などの堂舎がある。

なお、観音堂は西国三十三所観音巡礼の十四番札所として広く信仰を集めている。また、鐘楼は近江八景の一つ「三井の晩鐘」で知られる。

延暦寺

天台宗の総本山。比叡山に広大な寺域を持ち、平安中期に分立した寺門（園城寺）に対して山門とも呼ばれる。

開基の最澄は、延暦4年（785年）比叡山に登り、日吉社に付属する仏堂「神宮禪院」に起居して籠山修行を始め、同7年、薬師堂を創建、比叡山寺と称した。薬師堂はのちに一乗止観院（根本中堂）と呼ばれて、一山の中心堂舎となった。

最澄の宗教活動は、平安京に遷都した桓武天皇に支持され、延暦24年（805年）には入唐して天台山に学び、翌年、天台宗を開立。以来、平安京の鬼門を守る鎮護国家の道場として朝廷に信仰され、弘仁14年（823年）に延暦寺の寺号を与えられた。

その後、円仁・円珍が入唐して密教を取り入れて貴族の信仰を集め、平安中期、良源の時には、摂関家の後援で諸堂舎が大整備され、寺領も拡大した。また、多数の僧兵を擁して、平安後期、白河法皇が「天下三不如意」の一つに上げるほどの勢威を誇った。

一方、宗教的にも、源信が浄土教を広め、また、法然・親鸞・一遍・栄西・道元・日蓮ら、中世仏教の開創者を輩出している。

元龜2年（1571年）織田信長の焼き討ちで一山焼亡したが、豊臣秀吉や徳川氏の手で復興を見ている。

境内は三塔からなる。東塔は根本中堂を中心に戒壇院・大講堂などがある。現在の根本中堂は寛永17年（1640年）の建立で国宝。西塔は釈迦堂を中心に法華堂などがあり、現在の釈迦堂は秀吉が園城寺の弥勒堂（南北朝期）を移したもので重要文化財。横川には横川中堂を中心に四季講堂などがあり、現在の中堂は昭和46年再建。

西教寺

天台真盛宗の総本山。寺伝では、聖徳太子が創建、のち天智天皇から西教寺の勅願を賜り、平安時代に延暦寺中興の祖良源が、続いて横川の源信が庵を結び修行道場としたと伝えられる。

その後荒廃したが、室町時代末の文明18年（1486年）、延暦寺で20年間の修行を積んだ真盛が入寺し再興。当時は、混乱した世相を反映し、宗教界全体が大きな転機を迎えていたが、真盛は浄土教の先駆者源信の著『往生要集』の真義に帰り、戒律の厳守と称名念仏の励行を説いた。以来、現在に至るまで、絶えることなく念仏は続けられている。

本堂は桁行7間、梁間5間の壮大なもので、平安期の丈六阿彌陀如来坐像（重要文化財）を本尊としている。また、客殿（重要文化財）は伏見城の遺構を移したものと伝えられ、内部には狩野派の画家による人物・花鳥襖絵があり、一室には京都岡崎法勝寺伝来の秘仏薬師如来坐像（重要文化財）を安置。

元龜2年（1571年）織田信長の山門（延暦寺）焼き討ちに際し焼失するが、その後明智光秀が総門・庫裡などを寄進。その関係から境内には光秀の墓が残されている。

ひよしだいしゃ 日吉大社

平安初期、延暦寺の三代座主円仁えんにんの頃、一山守護の地主神、天台宗守護てんだいしゅうの護法神ごぼうしんとされ、中国天台山の守護神明にならさんって山王と呼ばれた。延暦寺の発展と並んで整備されたと見られ、平安初期は比叡神ひえのかみ（大宮）とおおみやと小比叡神こひえのかみ（二宮）の二神であったものが、やがて山王七社、さらに平安末期には山王二十一社となっている。

境内は、東本宮ひがしほんぐうと西本宮にしほんぐうの2区域からなる。東本宮は境内西にそびえる八王子山はちおうじやま（牛尾山）に鎮座した土着の大山咋神おおやまくいのかみ（小比叡）を祀ったもの。山頂には巨岩いわくら（岩座）があり、八王子宮おおやまくいのかみ（大山咋神）と三宮さんのみや（玉依姫神）がある。この山宮に対する里宮やまみやがそれぞれ二宮さとみやと樹下宮じゅげのみやである。

一方、西本宮は天津京遷都に当たって大和の三輪明神みわみょうじん（大己貴神・大比叡）を勧請したものと伝えられ、三輪明神を祀る大宮おおみやの他、八幡神はちまんじんを祀る宇佐宮うさくう、白山姫神しらやまひめのかみを祀る白山宮しらやまくうがある。なお、社殿は大半が桃山・江戸初期で重要文化財、両本殿は国宝。

たけべだいしゃ 建部大社

古代日本の軍事的統一に活躍した伝説上の英雄日本武尊やまとたけるのみことを祭神とする古社てんむ。天武天皇4年（675年）神崎郡建部郷かみさきぐんたけべごうから瀬田せたの東、大野山おおのやま上に遷座、さらに天平勝宝7年（755年）近江国の軍団の長の建部氏たけべが山麓の現在地に移して、近江一の宮としたと伝えられる。

平安時代には正一位しょういちいに叙されるなど朝廷の信仰も厚く、鎌倉時代には軍神として源頼朝を始め武家の信仰を集めた。

4 . 中世・近世における都市形成の経緯

中世になると、近江国内の水陸の交通路は、東国・北国庄園から京都への年貢上納ルートとして、一層の繁栄を見た。この交通の発達を背景に、例えば、延暦寺支配の堅田・坂本関のように、交通の要衝には関銭収入を目的とした関所が多数設けられた。

琵琶湖の最狭部に当たる堅田は往還する船を掌握して湖上交通を支配した。一方、坂本・大津は物資中継港として栄え、京都への陸運を担う馬借の根拠地ともなった。

近世には、元龜2年(1571年)織田信長による延暦寺の焼き討ち後、明智光秀により膝下の下坂本の湖岸に坂本城が築かれた。当時の下坂本は京への近道とされた山中越や湖西の北国街道及び琵琶湖航路を抑える格好の地であった。その後、政権が豊臣秀吉に握られるや、京・大坂・伏見と東国・北国とを結ぶ交通の拠点として大津が重視され、天正14年(1586年)頃に大津城が築かれた。

徳川家康政権も秀吉の政策を引き継ぎ、慶長7年(1602年)大津を東海道の宿に指定、幕府の直轄都市として大津代官を置き、大津の掌握に力を入れた。大津はこれ以降、宿場町・港町として賑わいを見せた。また、湖南の膳所崎には膳所城が築かれ、城下町が整備され、北部の堅田では堅田藩が独自の民政を行っていた。

主要都市の形成経緯

堅田

琵琶湖の最狭部に当たる堅田は、中世より「諸浦の親郷」としての先導的地位を保ち、往還する船を掌握して湖上交通を支配した。また、湖上の漁業権をも押さえていた。

このような湖上交通、漁業による町の発展は宗教の展開にも密接な関係を持ち、堅田の本福寺を中心とした堅田門徒の活躍は注目に値する。

また、地侍層の殿原衆と自営農漁民層の全人衆とからなる堅田衆の力によって町が組織化されるなど、独自の民政が行われていた。

坂本

坂本は平安時代初めに延暦寺が建立されてから門前町として発達し、湖上を渡る物資も多く、延暦寺の庄園から入る貢物が集散する都市として繁栄し、中世には人口1万数千人が居住する程の繁栄ぶりであった。

延暦寺の焼き打ちにより一時衰退するが、その後元龜2年(1571年)織田信長配下の明智光秀は下坂本の湖岸に壮麗な天守を持つ坂本城を築き、城下町として繁栄を取り戻した。

この城は天正10年(1582年)本能寺の変の後に焼失したが、豊臣秀吉が再建し、同14年頃に城が大津に移るまでこの地にあった。坂本城の移設後、城下町としての賑わ

いは失ったが、500石を領した延暦寺の門前町として、北陸との交通の要衝として人々を集めた。

おお づ

大津は中世から琵琶湖の港として発達したまちであり、豊臣秀吉が蔵入地の年貢を輸送したり、征韓の役に兵糧を集めるため、北国から琵琶湖に転送したことから、京都・伏見・大坂への起点として大津港が一段と繁栄することとなった。

天正14年(1586年)頃、当時坂本城主であった豊臣秀吉配下の浅野長吉(長政)が坂本城を大津の湖岸に移し大津城を築城した。慶長5年(1600年)関ヶ原合戦の際の籠城戦により大きな被害を受け、城は膳所へ移された。大津城本丸跡地は大津代官所と幕府直轄領からの年貢米を保管する御蔵として転用、また堀の一部が埋め立てられ湖岸の関(荷揚げ場)とされるなど、商業都市への第一歩を踏み出した。

その後、大津町は琵琶湖水運による諸物資の集荷港として、また、東海道の宿場として江戸時代初期から一層の繁栄を見せ、元禄年間(1688~1704年)には人口19,000人、町数100の都市へと成長した。湖岸には13ヶ所の関(荷揚げ場)が造られ、多くの丸子船が発着し、大名・旗本の蔵屋敷が軒を連ねていた。一方、北国街道と東海道の分岐点に当たる札の辻には、宿場の人足や伝馬を調達する人馬会所が置かれ、また、八丁筋には旅籠や本陣が建ち並んでおり、付近は運送業者や旅籠の客引き、往来する旅人などで混雑しており、宿場町としての賑わいを見せていた。

また、江戸時代の津町は商業都市として繁栄したが、そこで生み出された豊かな経済力は町人文化に活力を与え、やがて文学・絵画・工芸など多くの分野で花を咲かせた。中でも、江戸時代初期に始まる大津祭はそのような町人文化を代表するものとして、現在も受け継がれている。

ぜ ぜ

膳所城は、膳所の地が交通上、大津・坂本を抑え、京への警護にも都合がよい位置で軍事的要求があったため、慶長6年(1601年)に徳川家康の命により大津城を相模川河口の膳所崎に移すかたちで築かれた。

城下町は、西庄・木下・膳所・中庄・別保の膳所5ヶ村で形成され、北の大津口、南の瀬田口の2ヶ所に惣門が置かれ、城下町を通る人々を監視した。城下町の規模は貞享2年(1685年)で侍屋敷499軒、町屋409軒、寺22の合計930軒、人口3,094人であった。

また、膳所藩には松尾芭蕉がしばしば訪れ、文学を盛んにした。義仲寺に芭蕉の墓があり、句碑も多く、石山の幻住庵跡など周辺地域も含めて俳句の遺跡が多く見られる。